

世界をみつめて2

未完の辞書

橋本 勝雄

その授業を受講したのは、卒業していくサークルの先輩から古びた辞書をもらったからだ。単位は楽勝（そのころは「通し」の授業と呼ばれていた）という話につられ、生意気な大学生らしく古典語のひとつでもかじってみようと足を運んだ初回の教室には、予想したとおり、十名足らずの学生しかいなかった。

授業開始の予定時間から三十分も過ぎて、鼈甲眼鏡を掛けた白髪の語学教師が入ってきた。今思えば、じつにのんびりした時代である。

眼鏡は、黒板に向かってなにやら単語を書きつけると低い声で話し出した。アルファベットも読み方も抜きに、文法の基礎も触れず、辞書を開いて、一項目とその例文を解説する。

たしかに語学としては異例の講義だ。ぼくらはあわてて手元の辞書をめぐりだした。運よく単語に出くわす者、なかなか見つけれずに焦りだす者。バタ足すら習わずに海に放り出された子供のように戸惑う学生の姿が眼鏡の奥の眼には映っていないらしい。講義は早口ではなかったが、内容を書き取るのは難しかった。

教師も講義も一風変わっていたが、なんといっても奇妙なのは、ぼくら学生が持っていた辞書がどれもみな、使い込まれて黒ずんだ革装の表紙に剥げかけた金文字のある、ぼろぼろの中古本だったことだ。

話をしてみると、受講者の誰ひとりとして新しい辞書を買ったわけではなく、全員が先輩や友人から譲ってもらったことが判明した。この辞書はかなり前から品切絶版で、大学の書籍部どころか古書店でもお目にかからない代物だった。辞書を持っていない学生が一人いたが、次の授業以降、その姿を見かけることはなかった。結局、辞書が手に入らなかったらしい。

簡単に言えば、毎年、使いこまれた七冊の辞書を手にした七人の学生だけが、授業に出席していたことになる。

七冊の辞書はそれぞれ微妙に違っていた。先生の講義を聞いて書き込んだり、修正した

り、部分的に消したりした結果、すこしずつずれていったからだ。ぼくの先輩たちは気まぐれな性格だったらしく、詳しく書き込まれた箇所があるかと思えば、まったく手つかずの頁もあった。

しかし一番擦り切れてぼろぼろだったのは、先生自身が手にしていた八冊目の辞書だ。余白は真っ黒に見えるほど小さな文字で埋めつくされ、大量の付箋で膨れ上がって、閉じるために紐が巻かれていた。

授業が進むにつれて、もともとそれが完成した辞書ではなく、単純な単語帳だったのだと気がついた。老教授は数十年前に自費出版した辞書をいつの日か改訂するために、何年も何年も研究しながら講義していたのである。

資料とされた膨大な原典テキストから選び抜かれた例文が追加され、比較され、さらに選別されてゆくさまは、辞書が誕生する現場に立ち会っているようで、おぼろげにしか理解できない学生もある種の興奮を覚えたのは本当だ。

しかし、先生の現実の作業を眺めていると、ことばを少しずつ積み上げる、あるいは織り上げるといふより、子どものブロック遊びのようにことばを積んでは崩し、また新たな組み合わせを試みるばかりで、いっこうに前進する気配がない。

名詞、動詞、形容詞、副詞... ぼくは品詞の森をさまよいながら、文脈から切り離された断片的な例文を必死に暗記し、文法規則を引き出そうとしたが、無駄な試みだった。

一年があつという間に過ぎて、自分の卒業が近づいてきた。辞書を次の学生に引き渡せないで留年するという怪しげな噂さえあったけれど、なんとなく手放すのが惜しくなって、辞書を手元に置いておくことに決めた。

先生が改訂版を出版した話は聞いていない。今でも六人の学生を前に、例の講義を続けているにちがいない。

はしもと かつお（准教授・イタリア文学）